



明治期最初の天文学者・寺尾 寿のパリ留学時代

中 村 士

〈国立天文台天文情報公開センター新天体情報室 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1〉

e-mail: tsuko@cc.nao.ac.jp

最初の東京天文台台長、寺尾寿の生涯は、寺尾家の資料が戦災で焼失したために不明な点が少なくない。この報告では、日本国内及びフランスでの調査によって、東京大学入学以前の寺尾の教育とその晩年への影響、パリ留学時代の事跡、恩師ティスランとの関係、洋画家黒田清輝との親交などについて明らかにした。特に、寺尾が学んだパリのモンスウリ天文学校の発足と設立の目的に関する記事を発掘し、旧モンスウリ天文台の所在と観測施設について紹介した。

1. はじめに

寺尾寿（ひさし）の名は、最初の東京天文台長として若い世代でも知っている人がいると思う。明治維新後、新政府の海軍省、内務省、文部省はそれぞれの業務に天文観測が必要であることを主張して譲らず、個別に観象台を持っていました。明治21年（1888）6月になって漸く三省合併の天文台建設が実現し、麻布飯倉の地に東京天文台が誕生した。この時、帝国大学理科学院教授と併任で初代の東京天文台長に就任したのが、フランス留学から帰朝して間もない若き天文学者寺尾寿であった。寺尾がその後僅かな予算とスタッフとで長い間孤軍奮闘したことを思えば、東京天文台、ひいては国立天文台の基礎は寺尾が一人で築いたと言っても過言ではない。

一昨年、メキシコシティで開催された国際科学史連合の特別シンポジウムで、東京天文台の発足について報告する機会があった¹⁾。その時の資料調査から、予想に反して寺尾寿のまとまった伝記は今までないことを知ったので、寺尾と同じ機関に勤務する一後輩として初代台長の事跡をまとめておく義務感のようなものを若干感じ、寺尾関係の資料を少しづつ集め始めていた。そして昨年、思いがけず寺尾寿のご子孫の方からご連絡をいただき、

寺尾家と東京理科大学関係の資料を提供していただくことができた。

ご子孫のお話では、東京にあった寺尾家は太平洋戦争時の空襲で全焼し、寺尾寿の資料は全て失われたとのことであった。明治期を代表する知識人の一人であった寺尾寿には公私共に豊富な資料が当然残されているだろうという淡い期待があつただけに、戦災焼失の話は私にはショックだった。特に、フランスでの勉学時代の資料は寺尾寿自身しか所持していないはずの物だから、それだけ一層残念な思いがした。たまたま、江戸の天文曆学史を研究する文部科学省科学研究費を平成14年度から頂き、江戸時代の天文・測量器具のルーツをヨーロッパに探しに行くことになった。そこでこの機会を利用して、フランスでの寺尾寿の足跡を辿ってみることを思い立った。本稿では、従来余り知られていない寺尾のフランスに関係したトピックのいくつかを紹介する。

2. 寺尾の上京と外国語教育

大正12年（1923）8月に寺尾寿が亡くなった時に『天文月報』に追悼号が出た。その中に東京大学所蔵の履歴書の抜粋が載っているので、他の資料で補って寺尾の語学教育とフランス関連の事跡を以下に抜書きしてみる。

- 元治元年(1864)9歳：この頃より藩校修猷館に学ぶ。
- 明治2年(1869)14歳頃：福岡の村上塾に入り、弟亨と共に短期間外国語を学ぶ。
- 明治6年(1873)18歳：上京、横浜の高島学校にて初めて仏語を習う。10月、東京外語学校入学、仏語修業。
- 明治7年(1874)19歳：9月、開成学校入学。
- 明治11年(1878)23歳：12月、東京大学理学部物理学科卒業。
- 明治12年(1879)24歳：5月17日、フランスに留学。
7月、モンスウリ天文台に入り星学実地見習。
11月1日、パリ大学に入り数学及び星学修業。
12月、パリ天文台に入り実地星学修業。
- 明治15年(1882)27歳：1月12日、仏国文部卿より「リサンシェ・エス・シアンス・マテマティク」の学位受領(パリ大学)。
12月、金星日面経過観察のため、仏国政府より「マルチニク」島へ観察委員派遣につき随行。
翌年3月3日、米国を経て帰朝。
- 明治16年(1883)28歳：夏、渡仏前の黒田清輝(17歳)に仏語を教授する。
- 明治22年(1889)34歳：8月、仏国パリ府において万国測地学会議開設に付、委員として被差遣。
- 大正11年(1922)67歳：5月10日、フランス共和国政府より贈与したる「コンマンドール・メリット・アグリコル」勲章を受領。

寺尾 寿ご子孫のお話では、寺尾家の先祖は代々直方藩・福岡藩に仕えた士族の家柄であり、寿はじめ藩校修猷館(修猷館高校の前身)に学んだ。尊王攘夷思想の影響から、当時の多くの藩校と同様に修猷館も伝統的な儒学に加えて国学も正科として採用した。後年、「(寿が)国文学者になろうとして、若い修行時代にはその機会を得ず、この方面なら頭角をあらわすことが出来たろうにと、いつも残念がっていた」と息子の寺尾 新が述懐し

ているが²⁾、これは修猷館時代に受けた国学教育のせいであろうと私は想像している。引退後、長年の思いを寺尾は実行に移した。現在、九州大学に所蔵されている約14000冊に及ぶ「音無文庫」は、寺尾が伊東に隠棲したのち収集し勉強した国文学・国史関係の旧蔵書である。この文庫名は、寿が好んだ伊東の居宅近くを流れる清流、音無川に因んで命名した名であると言う。

修猷館の後、寺尾は「村上の塾」で、3歳年下の弟亨と共に初めて外国語を学ぶ³⁾。この村上塾がどのような学校だったのか、幕末から明治への福岡地方の学校制度を研究されている九州大学の新谷恭明先生に調べて頂いた。福岡では村上仏山という人が開いた漢学塾がよく知られているが塾生名簿に二人の名はない、漢学塾が外国語を教えたとも思えず、詳細は不明とのことだった。

18歳の時に寺尾は上京する。はじめ横浜の高島学校に入学したが、これは横浜にいた叔父が学資を援助してくれたお蔭で上京できたのだと寺尾自身が述べている。高島学校ではじめて仏語を学んだ。高島学校とは、現在も高島台や高島町という横浜の地名に名を残す高島嘉右衛門が明治4年に開校した語学中心の私立学校で、ちなみに高島は高島易断の創始者としても知られている。高島学校は、福沢諭吉の慶應義塾のような教育理念に基づく学校ではなく、開港場横浜の経済的発展を見越したいわゆる投機目的で経営された学校だった。

そのため、あてにしていた福沢の招聘や国からの経営援助が得られないと思われるや、高島は僅か2年で県に学校を売却してしまう。外国人教師の待遇も決して良かったとは言えず、当時生徒に最も人気の高かった一人の米人教師が、契約条件を不満として明治6年に辞職すると、生徒の多くは失望の余り東京の開成学校などに転校していった。寺尾が高島学校に入学した同じ年の10月に東京外語学校に移ったのは、この騒ぎに巻き込まれたものと思われる。このように短命で理念の欠けた高島学校ではあったが、全国から優秀な学生を引



図1. 旧モンスウリ天文台の赤道儀ドーム（モンスウリ公園内）

き付け、寺尾以外にも岡倉天心、星亨など幾多の逸材を輩出したことでも知られる⁴⁾。

東京に移転した翌年、寺尾は開成学校に入学し、明治11年に東京大学理学部の物理学科を23歳で卒業する。学生時代の寺尾が大学授業の予習復習などには無縁の秀才であったことは、何人もの同級生や後輩が証言している。試験の直前でも、普段のように級友を芝居や寄席に誘ったため彼らは大いに迷惑したが、寺尾はこれをほとんど無意識にやっていたらしい。後年、こうした行いを意図的に誇示するいわゆる“東大型秀才”というステレオタイプな描像が生まれたのも、存外寺尾辺りに起源があるのかも知れない。

卒業の翌年、寺尾はいよいよフランスに留学することになる。『幕末明治海外渡航者総覧』¹¹⁾などを見ると、寺尾より以前に数物系の分野でフランスに官費留学した者の記録はない。従って、フ

ランス留学を寺尾が選択したのは先行者の影響などではなさそうだが、はっきりした動機は分からない。

寿と一緒に仏語を学んだ弟の寺尾 亨について少し触れておく。日本史では、寿より亨の方がずっと良く知られた存在である。亨は寿と同じくフランスに留学した後、帝国大学法科大学の教授になった。我が国の国際法学の創始者・権威である。國士的な気質の人で、日露戦争開戦を主張した“七博士建白書事件”に加わり、中国に辛亥革命が起こると、東大教授の地位を放擲して孫文らを支援する運動に身を投じた。

3. 渡仏

上記の履歴書によれば明治12年の7月、寺尾は最初モンスウリ天文台で実地星学の修行をしたと記されている。モンスウリ天文台とはどこにありど



図2. 旧モンスウリ天文台の二連子午儀小屋（モンスウリ公園内）。特徴のある屋根の尖りが、かつて2台の子午儀を納めていたことを窺わせる。

の様な天文台だったか、その所在はパリ天文台から来日していたS氏に尋ねて簡単に判明した。現在のパリ天文台の真南数kmに位置するモンスウリ(Montsouris)公園に昔あったBureau des Longitudes(経度局)の観測所であると。しかし、寺尾がパリ天文台の前にモンスウリ天文台に入所した理由やこの天文台が設立された時期と目的などは、フランス天文学史の第一人者であるパリ天文台のデバルバ女史に尋ねても判然としなかった。戦前の日本のアマチュア天文台まで採録している「天文台・天文学者一覧」¹⁰⁾にも、モンスウリ天文台は経度局の観測所という簡単な記載しかない。パリ天文台に着いてすぐに、デバルバさんの示唆に従って寺尾が滞仏した期間前後の「パリ天文台年報」を調べてみたが、モンスウリ天文台に関しては何も分からず、帰国間際、意を決して年報を

あるだけ全部見直して見たら、寺尾の滞仏より10年も後の年報⁵⁾にモンスウリ天文台の簡単な報告をやつと見つけることができた。パリ天文台台長だったムシェ(E. Mouchez)が退任前に、モンスウリ天文台を記憶に留めるために書き残したのである。

それによれば、モンスウリ天文台は明治7年(1874)に起こった金星の太陽面経過観測の反省から1875年に誕生した。その時の経験から、フランスの天文学研究は数理天文学や理論に偏重し過ぎて、観測地の経緯度を決めるなどの実地天文学に弱い、従って若い天文学者にこうした教育をほどこす必要性が痛感された。たまたま、南のパリ城壁跡地にパリ市が公園を建設中だったので、その地に訓練用の観測所が経度局とパリ市議会の後援で作られた。赤道儀望遠鏡と二連子午儀などを備えていた。この組織は財政難で1877年に一旦解



図3. 寺尾寿の師, F. ティスランの墓 (モンパルナス墓地)

散する。1879年になってムシェ台長は、今度はモンスウリ天文台をパリ天文台附属の“天文学学校”として再興した。その設置目的には、将来プロの研究者をめざす若い天文学者に観測天文学の基礎を教育することと述べられている。

年報には、ルーマニア、ギリシア、中国、日本からの留学生もそこで数ヶ月間訓練されたと書いてある。名前こそ載っていないが、この日本人留学生が寺尾寿であったのは疑いない。この学校もやはり経済上の理由から数年後には廃止になった。寺尾が渡仏したのは1879年だから、まさにモンスウリ天文学校が開設された年であり、フランス近代天文学の教育を基礎から組織的に受けるチャンスに寺尾は運良く恵まれたのである。

モンスウリ公園に当時の観測施設が残っていないかどうか興味があったので、電車に乗って行ってみた。気象観測施設と測地原点標があるだけでしたとデバルバさんに報告すると、そんなことはない、赤道儀ドームと二連子午儀の小屋が残っていると公園内の詳しい見取り図を書いてくれた。これらの施設について今では知っている人はほとんどいな

い、デバルバさんも自分の先生に教えられたから知っているが、書いたものにはないとのことだった。そこで大慌てで引き返して撮ったのが図1, 2である。現在では赤道儀ドームは公園のパビリオンの様に改修され、二連子午儀小屋も事務所として使われているので、教えられなければ元の天文観測所とはとても分らない。寺尾がこれらの装置で観測した当時の状況を想像しながら周囲を巡ってみた。初秋の夕日を浴びて母子がわきで遊び戯れている。公園内にフランス天文協会の建物があったので、中

にいた職員らにモンスウリ天文台について質問してみたが誰も知らなかった。

パリ天文台における寺尾の師は、「天体力学教程」4巻の著書で知られるティスラン (Francois Felix Tisserand) であった。ティスランは明治7年の金星太陽面経過観測で既に日本に来ている。当時、ドイツの教授達は日本の留学生に対して過酷な対応が多くなったが、対照的に英國、フランスの先生は概して留学生に親切丁寧であったとされている。その例としてティスランが引用されている位だから⁶⁾、寺尾にとってティスランは良き先生であったに違いない。ティスランが寺尾について何か書き残していないかと考え、パリ天文台図書館の「手稿リスト総目」にあたってみたが、ティスラン文書には数編の計算草稿しかなかった。寺尾寿のご子孫の話によれば、パリ大学で数学と天体力学とを教わったポアンカレについても、寿は楽しかった思い出話をよく物語っていたそうである。

パリ大学における寺尾の就学記録を閲覧したいと思ったが、何人かの大学関係者の話からこれは見込みがなさそうで諦めた。フランスでは昔から伝統



図4. 寺尾理学博士肖像（黒田清輝画 1909年）,『天文月報』からの転載（実物は東文研所蔵）。

的に、大学の入学式、卒業式は一切しないのだそうである。卒業証書の控えも大学・文部省には残らないから、卒業証書は自分で大事に保管しなさいと言われるのだそうだ。しかしこれでは余りにひどいと最近では反省が生まれて、大学側が昔の卒業生の卒業証書を借りて卒業生名簿を整備し始めたと聞いた。

ボアンカレやティスランの墓所も再度訪れたかった。以前にパリに来た時、モンパルナス墓地をうろついていて、偶然見つけた記憶があったからである。モンパルナス墓地にはサルトルやボーボワールなど著名人の墓が多数ある。行ってみると、ティスランの墓と思ったのは記憶違いで、ルベリエの墓であった。しかし、探せばティスランの墓ももしや見つかるかも知ないと散々歩き回ったが無駄足に終った。倦み疲れて、近くの平らな墓石に腰掛けてしまし休息した。陽も傾いたので諦めて立ち上がった時、視野の端を FELIX という文字がかすめた——ティスランの墓に腰かけていたのである

(図3)。墓石は柔らかい砂岩で、上面の細かい文字は既に風化してよく読めない。ここの墓石の多くはなぜか同様な種類の石のため、ルベリエの墓は死後から2回も作り直されたと後に教えられた。

寺尾は3年間のパリでの勉学を終え、パリ大学から数理学学士の学位を貰うと、1882年12月のマルチニック島での金星太陽面経過観測に参加してから帰国した。この時の寺尾自身による観測報告が斎藤国治氏によって翻訳紹介されている⁷⁾。極東の島国から来た一介の留学生に、著名な学術誌 Comptes Rendus に報告を掲載させたのも、ティスランが若い天文学者の卵を鼓舞するために行なった好意の表われと考えたい。

4. 洋画家黒田清輝との親交

『天文月報』の寺尾 寿追悼号には、当時としては珍しいカラー写真による寺尾の肖像画が付いている⁸⁾ (図4)。その端正で的確な筆のタッチはとても素人の絵には見えず、名のある画家による作品を思わせた。巻末をみたら黒田清輝とあった。黒田清輝は外光派と称された明るく写実的な作品と、東京芸大の油絵科教授や白馬会における活動から、日本近代洋画の父と呼ばれた人である。

経緯は不明だが、黒田清輝はフランスに法律の勉強をしに行く前に、17歳の時、帰朝して間もない寺尾寿に仏語を習っている。凡帳面な人で、18歳の時から黒田は多くの日記を残した。その全集では、1892年10月に黒田がパリ郊外のグレー村から父に宛てた手紙の控として、寺尾 寿について次のように言及している。「道具は大抵久米(桂一郎)氏の物ゆえ同氏の望みに任せ寺尾氏へ引き渡し…寺尾氏方へ持ち込み預け申候。寺尾氏と申すは寺尾亭と言う人に御座候。先年私の仏語の教師として語頬み被下候寺尾 寿と申す天文博士の弟にて、法律学を以って日本の大学校の教員を被勤…」。

黒田作品リストによれば、寺尾肖像が描かれたのはだいぶ後年の明治42年(1909)なので、黒田のフランス留学後も寺尾 寿と交際があったのだろう

天球儀

と考えて東京文化財研究所の山梨絵美子さんに調べて頂いたら、寺尾から黒田に宛てた明治27年の賀状が見つかった。更に、寺尾寿の肖像が描かれた経緯を黒田自身が述べている記事を、東大総合図書館の地下書庫で見つけることができた⁹⁾。

第3回文部省美術展覧会（文展）の開催を前にして、主要な画家が自分の作品の製作意図や抱負を語っている中に黒田清輝の談話も載っていた。画題は「寺尾理学博士肖像」である。

黒田は語る、「私の画には苦心の作と云うのはない…私の出品は、一年中に出来た画の中で、最も自分の意に適ふたのを出すのです…。今年の出品に就ては、先頃自分の庭で描いた百合の花と、寺尾博士の肖像とを出さうと思う。今度博士が在職二十五年に就て、其祝意を表する為めに、大學の教授や其他有志の人達から、博士の肖像を二枚こしらえて、一つは博士に贈呈し、一つは天文臺に置くことになって、其の一つは和田（英作）君が畫いた、私の画いたのは博士に呈する方です。博士には私は古い縁故があるので…博士が前に洋行から歸朝されたとき、私は博士に就て始めて佛蘭西語を習ったことがある。今度博士の肖像画を画いたことは、大に幸福に感じたところで、大に博士の性格を表そうと思って画いた、勿論寫真からでなく、博士に座つてもらって画いたので、片光線の妙な画ですがネ」。

この談話から、寺尾肖像が描かれたいきさつも、黒田が寺尾を敬愛する気持も良く分かる。また、寺尾の肖像画には和田が描いた絵がもう一枚存在していたことが理解される。ちなみに和田英作とは黒田の弟子で、後に東京芸大的校長を勤め、文化勲章を授与された人である。和田による寺尾の肖像画はどうなったのだろう。関東大震災で失われたのだろうか。私はなんとなく、和田の絵もどこかで今もひっそりと眠っている気がするのだが…。

明治22年に寺尾が出席した万国測地学会議については、会議報告のような資料はパリ天文台では見つからなかった。今後の研究課題である。ま

た、大正11年に仏国政府から授与された勲章についても問題が残る。勲章の名を文字通り訳せば農事功勞賞であろう。しかし天文学者に農事功勞賞を果たして贈るだろうかという疑問は、デバルバさんを初め複数の人から聞かされた。近い将来、フランスの賞勲局記録でも調べる機会があれば確認したいと考えている。

本研究は、文部科学省特定領域科学的研究費「江戸のモノづくり」、課題番号14023112の援助で行われた。寺尾寿のお孫さんにあたる寺尾隆氏と、紹介の労を取られた西山峰雄氏には深く感謝する。

参考文献

- 1) シンポジウム報告の日本語版：中村士，2002，東洋研究（大東文化大学東洋研究所）第43号，1
- 2) 父の書斎，1943，三省堂書店
- 3) 東京物理学校五十年小史，1930，東京物理学校（現東京理科大学）
- 4) 多田建次，1980，福沢諭吉年鑑（福沢諭吉協会），7, 54
- 5) Rapport annuel sur l'Etat de l'Observatoire de Paris pour l'annee 1890, 1891, 30
- 6) Bartholomew J.R., 1989, The Formation of Science in Japan, Chap.5 (Yale Univ. Press)
- 7) 斎藤國治, 篠沢志津代, 1973, 東京天文台報, 第16卷, 第2冊, 259
- 8) 天文月報, 1923, 第16卷, 9号, 131
- 9) 美術新報, 1909, 第9卷, 第1号, 10
- 10) Rigaux F., 1958, Les observatoires astromiques et les astronomes, Bruxelles
- 11) 手塚晃ほか, 1992, 幕末明治海外渡航者総覧, 柏書房

Sojourn in Paris of Hisashi Terao, the First Japanese Modern Astronomer

Tsuko NAKAMURA

National Astronomical Observatory of Japan

Abstract: Through a domestic search as well as the one in Paris, I made clear the early life of Hisashi Terao, the first director of Tokyo Astronomical Observatory, his astronomical education in Paris, and the subsequent relation with the famous painter Seiki Kuroda. In particular, the origin and role of Montsouris Astronomical Training School were discussed.